



コバルトレ女川 女川復興のシンボルとして

学研「スポーツ感動物語」

小林 良介

東日本大震災によって、壊滅的な打撃を受けた女川の町。そこに、Jリーグ入りを目指しているひとつのサッカーチームがあった。選手たちは、ガスも水道も電気も止まった町で避難所を回り、必死で、わずかに残された食料や水を配り続けた。寒さと空腹に耐えながらサバイバルをなんとか生き抜いたが、チームは1年間の活動休止を余儀なくされた。

このままここに残れば、サッカーができない。試合にも出られない。サッカー選手としての大きな決断が迫られたとき、彼らがとった行動とは。

女川の町を襲った地震、そして大津波

宮城県牡鹿郡に面した女川湾。その港付近に立つ事務所で働いていた檜垣篤典（ひがきあつのり）は、建物が揺れていることに気がついた。昨日も大きな地震があったが、今回はそれ以上だ。建物が崩れてしまいそうなほどの揺れに危険を感じてなんとか外に出ると、地震はさらに大きくなり、今度は足元の地面が割れ始めた。

2011年3月11日のことだ。後に東日本大震災と名付けられたこの地震で、女川は震度4強の揺れに見舞われた。檜垣にとって、これまで体験したことのない大きな地震だった。どれほどの時間がたったろう。やがて揺れは治まった。同じように建物の外に逃げてきた人と話をしていると、通りがかった知り合いのタクシー運転手が車の窓を開け、大きな声で叫んだ。「何やってんだ、早く高台に逃げろ！津波が来るぞ！」

それほど危機感にはななかったが、言われたとおりに檜垣は車に乗って高台へと移動した。一番近くにある高い場所といえる町立病院だが、あそこは駐車場はせまい。少し離れているけれど、総合運動公園に逃げようとして檜垣は走った。

敷地内にある総合体育館にはすでに1000人以上の人たちが、着の身着のまま避難していた。やがて日が暮れ始め、寒さが増してきた。夜になればもっと冷えてくるだろう。人々は暖をとるために、木でできたゴミ箱や近くの小学校にあった教科書などを燃やし始めた。運動場のあちこちでたき火が焚かれた。もっと燃やすものを探そうと、体育館から少し離れた中学校へと向かった檜垣は、そこで初めて、津波に襲われた女川の町を見下ろしたのだった。

「あの光景と、全く同じじゃないか……！」

それは、広島県で生まれ育った檜垣が、幼い頃から繰り返し記録映画や写真で見せられてきた、あの場面。原爆を落とされた直後の、ヒロシマの風景そのものだった。津波によって町がなくなっていた。最初に逃げようと思っていた町立病院もまた、津波に飲まれていた。

働きながらJリーグを目指す若者たち

コバルトレ女川は、スポーツを通して少子化や過疎化に悩む町を活性化させよう、将来のJリーグ入りを目指し、2006年に誕生したサッカーチームだ。宮城県牡鹿郡女川町をホームタウンに地元企業をスポンサーとして、町民・サポーターとともに地元密着型の社会人サッカークラブとして運営されている。チームカラーは青。コバルトレとは、コバルブルーの海と、緑豊かな森（フォール）を組み合わせた造語だ。女川のすばらしい自然から、そのチーム名は生まれた。

発足したその年に石巻市民リーグで優勝、宮城県リーグに昇格。翌2007年には宮城県リーグで優勝し、東北リーグ2部に昇格した。これはJリーグの最高峰、J1から数えて4番目のカテゴリとなる社会人リーグだ。

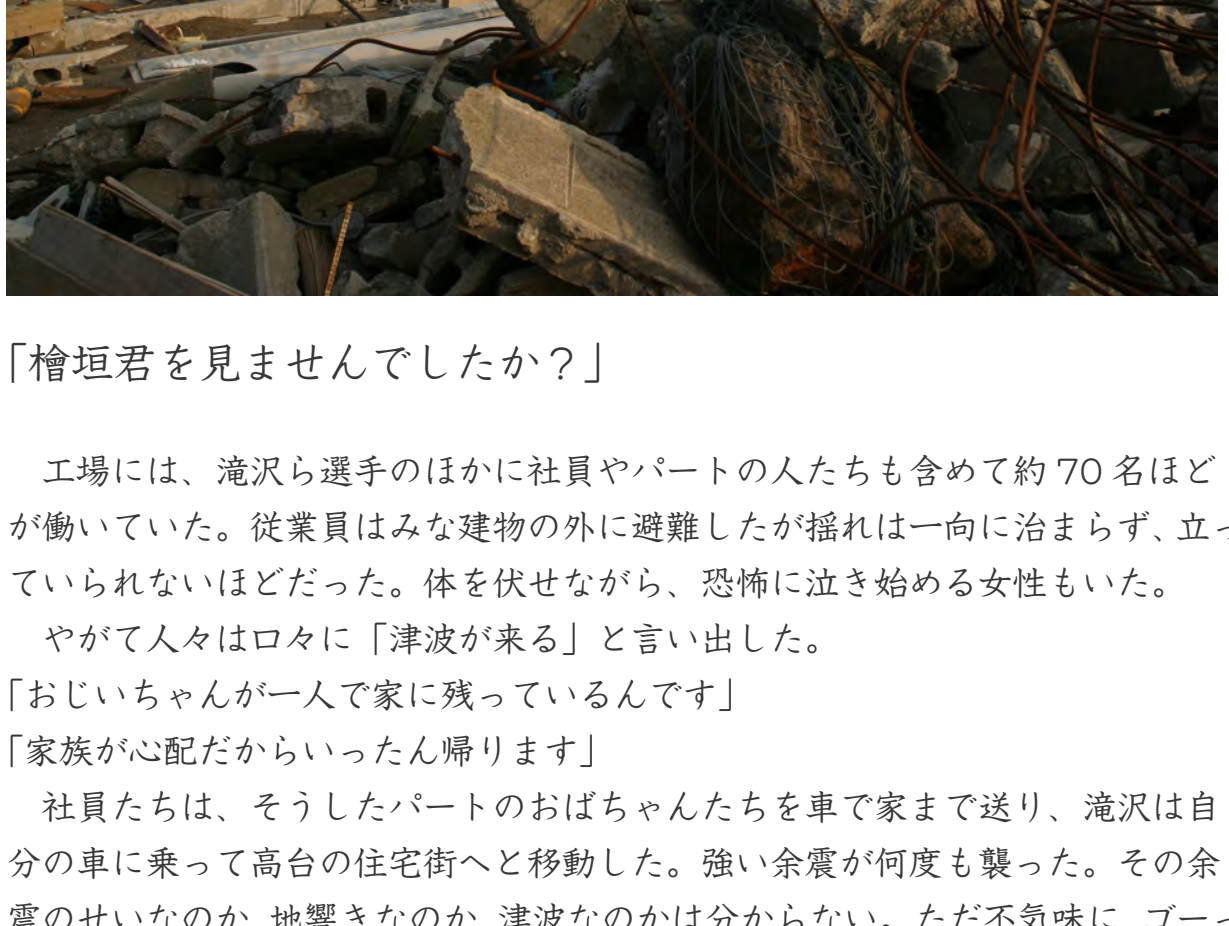
県内外から選手を集め、地域の人々に支えられ、順調に成長を重ねてきたコバルトレ女川。

このチームに、滝沢陽介がやってきたのは2007年のことだ。幼い頃からサッカーを続けてきた当時21歳の滝沢は、足首のじん帯断裂という大きなケガから復帰を果たそうとリハビリに努めていた。それまで加入していたチームとの契約も切れており、サッカーを続けていくために次のチームを探していた滝沢は、女川にJリーグ入りをを目指すチームがあることを知り合いから教えられ、その様子を見に来たのだった。2日間の滞在中に練習試合があった。チームは、テストの意味もかねて滝沢をこの試合に出場させた。そして試合を終えた滝沢に、コバルトレ女川の男性サポーターが話しかけてきた。「練習生の方ですよ？ ぜひうちのチームに入ってくださいよ。一緒に戦いましょう」

この他に、スポンサー企業の社長からも「女川のためにやってほしい」と声をかけられた。チームの最高経営責任者からは「女川は人口1万人の小さな町だが、我々はここからJリーグ入りを目指している」と聞かされた。そうした人々の熱意にひかれ、滝沢は入団を決めた。働く場所があることと、寮があることも、ありがたかった。寮といっても、もとは旅館だった建物を改装したものだ。

朝は8時から夕方の5時まで仕事。メインスポンサー企業であるかまぼこメーカー「高政」の工場で働き、夜6時から9時まで練習時間。全部で20名ほどの選手の約半数がここで働いており、他の選手たちもまた、チームを応援してくれる地元の企業で昼間は働きながら、夜になれば練習を重ねてきた。夢のひとつ、Jリーグへの昇格だ。

そんなある日。滝沢がかまぼこ工場でフォークリフトに乗って作業をしているときに、あの地震が起こった。



「檜垣君を見ませんでしたか？」

工場には、滝沢に選手のほかに社員やパートの人たちも含めて約70名ほどが働いていた。従業員はみな建物の外に避難したが揺れは一向に治まらず、立っ

ていられないほどだった。体を伏せながら、恐怖に泣き始める女性もいた。やがて人々は口々に「津波が来る」と言い出した。

「おじいちゃんが一人で家に残っているんです」「お家族が心配だからいったん帰ります」

社員たちは、そうしたパートのおおちゃんたちを車で家まで送り、滝沢は自分の車に乗って高台の住宅街へと移動した。強い余震が何度も襲った。その余震のせいなのか、地震なのか、津波なのかは分からない。ただ不気味に、ゴーンという音だけが滝沢の耳に響いていた。

あたりが薄暗くなり始めた頃、他の社員の車の中で、滝沢はテレビを見た。そこで初めて、何が起きたのかを知った。テレビ画面の右隅にある日本地図はそのほぼ全部が、津波警報を示す赤く太い線で囲まれていた。それを見た選手のひとりには「日本が…なくなっちゃうんじゃないのか」とつぶやいた。

夕方になり雪が降り始めてきた。携帯電話と財布だけを持って逃げた滝沢はジャージ姿のまま、寒さに震えながら車の中で一夜を過ごした。

翌朝、一番最初に気になったのは、他の選手たちの安否だ。中には、海の近くで働いている者もいる。キャプテンの檜垣君もそうだ。女川湾の近くの事務所にはいなかった。滝沢は同じ工場に働いていた選手たちとともに、町の、もうひとつの高台である総合運動公園へと向かった。高台から見下ろすと、そこには見慣れていた町の変わり果てた姿があった。車で行くルートは瓦礫によってふさがれていたため、山道を40分ほど歩いてようやく総合体育館に着いた。そこで見た光景にも、滝沢は大きなショックを受けた。

泣きつづけている女性。裸足のまま逃げたのか、靴すら履いていない少年。そして、並べられている遺体。もはや何も考えられず、滝沢はただ、ここにいるはずの檜垣を探した。見たという人もいたが、本人の姿はどこにも見当たらなかった。

「檜垣君を見ませんか？ 誰か、檜垣君を見ませんでしたか？」

そのとき運動場の向こうから、おばあさんを背負った檜垣が、ゆっくりと上ってくるのが見えた。逃げ遅れて孤立した人たちの救助を行っていたのだった。地震が起きてから、初めて滝沢は泣いた。

ひとり、またひとり無事だった選手たちが総合体育館に集まり始めていた。檜垣と滝沢は、まだ見つからないチームメイトの情報を集めるため、町の人々に訪ね歩いてきた。ほとんどどの選手が難を逃れていたが、震災以来、誰もその姿を見ていない。吉田もいない。吉田もいない。

「吉田は多分、ダメかもしれない」

尋ねられた人の中には、そう口にする者もいた。確かに、あの壊滅した町を見れば、希望をもつことは難しかった。滝沢も檜垣も、あきらめかけていた。

町で一番大きな避難所である総合体育館には、まだたくさんの人々が向かっていた。そこにやってくる人々の中に、滝沢は見慣れた青いジャージを見つけた。吉田だった。行方が分からなくなってしまった最後の一人、吉田もまた、檜垣と同じように、おばあさんを背負って歩いてきた。

コバルトレ女川の選手は、全員が無事であった。

改めて知った、女川の人々の深い絆

震災2日目。避難所には、水も食料も足りなかった。幸いなことにかまぼこ工場は津波の被害に遭うことなく、百貨店などに出荷する予定だった高級かまぼこもそのまま残っていた。社長はたまたま海外に出張しており不在であったが、選手たちはそのかまぼこを、約20ヶ所ある避難所に配り歩いた。

また、近くの水産工場と協力し、トラックを給水車に改造して、備蓄していた水も配った。その水がなくなると今度は浄水所に行き、そこから汲み上げた水をまた配って回った。トラックを運転しているのは、普段、水産会で働いている地元の運転手だ。どこに誰が住んでいるのかを把握し、おじいさんやおばあさんが一人暮らしをしている家などを1軒1軒訪れる姿に、滝沢は「すごい」と思いながら水を運んだ。

1週間が過ぎた頃、社長が帰ってきた。商品であるかまぼこを勝手に地域の住民に配ったことを知った社長は言った。「原料はまだ十分にあるな。発電機さえあれば、2本ある生産ラインのうち1本は稼働させられるはずだ」

輸出立のあたにかまぼこを作ってもっと配ろうと、社長は指示を出した。町内で水産加工品を生産する約20軒の工場のうち、唯一被害が小さく、生産を再開できるのがこの「高政」の工場だった。町は東北電力に依頼していた緊急発電車を優先的にこの工場に回し、コバルトレ女川の選手たちはボランティアで生産ラインに入った。慣れない方が揃ったえがいて食べた気にならないから」という社長の指示により、普段の商品よりも厚めの揚げかまぼこが作られ、選手たちは町内に運び続けた。

壁に張り出されていた、目覚えある人々の名前

コバルトレ女川のサポーターの一人に、選手から「じゅんちゃん」と呼ばれ親しまれている50代のおおばあさんがいた。じゅんちゃんは試合の日にはいつも応援に訪れ、選手たちに声をかけた。「いげー、いげー」

東北弁で声援を送るだけでなく、選手たちにケーキを作ってきたり、試合の前には混ぜご飯やもち米で作ったおにぎりなどを持ってきてくれた。時には職場仲間のおおばあちゃんたちを引連れに見に来てくれることもあった。選手たちもまたじゅんちゃんを慕い、その日にプレゼントを贈ったりしていた。「あんたらは私の息子だ」が口癖の、熱心なサポーターだった。

そのじゅんちゃんの遺体があがったと、滝沢は、じゅんちゃんの娘から聞いた。「お母さんに会って行ってあげて下さい」

花を手向けるため、檜垣とともに遺体安置所に行くと、そこには数百名のひつぎが整然と並べられていた。入り口は、安置されている人々の名前が張り出されていた。顔見知りなサポーターや、一緒に飲みに行った知り合いの名前があった。滝沢が住んでいた寮の食堂のおじいさんの名前もあった。おじいさんは「試合で活躍できるように」と選手ひとりひとりの好物を聞いては作ってくれる、やさしい人だった。滝沢の目から、また涙がこぼれた。

お世話になった人たちに今、自分ができることは、ただ水や食料を配るだけだ。生き残った人々の役に立ちたい。そう思っていた滝沢は震災から1週間が過ぎた頃、抗がん剤の治療が受けられなくなってしまったサポーターを、車で東京に送り届けることになった。日曜日になった人帯るた。滝沢は地元である埼玉県川口市の親や友人に伝えた。まる1週間風呂に入ることもできなかった体を、チームメイトとともに雪解け水が流れる冷たい川で洗い、女川を後にした。サポーターを病院に送り届け、川口に戻った滝沢は驚いた。

「これが、あの女川と同じ日本か？」

電気が通っていた。暖かいお風呂があった。食料があった。何事もなかったかのような平和な風景。ガスも水道も電気も、女川では復旧の目途すら立っていなかった。夜は、未だにろうそくの灯りだけが頼りだった。

もう、あそこへは帰りたくないという思いが一瞬頭をよぎった。しかし滝沢は、食料や衣類、生活用品などの支援物資を山ほど車に積み込んで、その日のうちに再び女川へと戻っていった。それは、滝沢の友人たちが集めてくれたのだった。入りきれない物資はもう1台の車に積み、友人の一人がそれを運転して運んでくれた。

子どもたちとともにボールを追いかけて

地震から3週間が過ぎた頃、ようやく救援物資が届き始めた。まだ充分とはいえないが、飢えや寒さで死ぬことの危険は去った。あの日以来、ただ目の前

にあること、やるべきことだけをやり続けてきた選手たちに、少しだけ余裕が生まれ始めてきた。「そろそろ、蹴りに行かない？」

コバルトレ女川のクラブハウスは津波によって倒壊し、ユニフォームやボールなどの全てが流された。しかし、自主練習をするためにいつもボールを持ち歩いてくる選手がいた。そのひとつのボールを使って、高台の空き地で選手たちは久しぶりにサッカーをした。そこに、子どもたちが集まってきた。地震で家や友人を亡くし、傷ついた子どもたち。選手は一緒になってボールを追った。

水はないため、洗濯をすることもシャワーを浴びることもできないことは知っていた。しかし選手は子どもたちと一緒に汗を流し、土ぼこりにまみれ真っ黒になって遊んだ。

地震から1ヵ月後の4月。「高政」の会議室に、コバルトレ女川の関係者全員が集められた。ここで、最高経営責任者は、チームの1年間活動休止を伝えた。来年3月のリーグスタートまで、チームとしてリーグ戦などの試合には参加しないことを決定したのだ。この状況下ではやむをえない判断と言えた。

檜垣は、チームのキャプテンであると同時に、コバルトレ女川のユースチーム監督でもある。元々は広島に生まれ、長崎県にあるサッカーの強豪・国見高校を卒業後、東京の大学へも進み、そして何人か紹介されて女川へとやってきた。そのチーム創立から5年にわたって女川の人々と関わるうちに、この町と、この町の人々が好きになっていた。小学校に入学したばかりの頃、友だちがひとり増えるたびに、それを親に話していたときの気持ちに似ていた。この町で知り合いや友だちがひとり増えるたびにうれしくて、チームメイトにその話をしていた。そうした人々や、自分の心が「あっちゃん」と呼んで慕ってくる子どもたちを置いて、今、自分だけがチームを離れることなどできるはずもない。チームが活動を休止している間も女川に残り、チームのため、町のためになることをしていこうと決めていた。

また檜垣には、ここを離れることのできない大きな理由が、もうひとつあった。

子どもたちと、チームのために

残る決断をした選手がいる一方で、女川を離れることを決めた者もいた。もともとコバルトレ女川の選手たちは県外から、サッカーを続けるためにやってきた若者たちだ。滝沢もその一人である。自分は幼稚園の頃からサッカーしかしてこなかった。サッカーができない日々はもういやだ。サッカーをしたい。そう考えた滝沢は埼玉県に戻り、地元で選手として活躍できるチームを探そうと決めた。

それは、この先も、ずっと女川でサッカーを続けていくための決断だった。女川の町が大好きになってしまったのは、檜垣だけではなく。ここで3年以上を過ごし、離れることができなくなってしまった女川のために、サッカーを続けていきたい。そのためには、自分がサッカーを続けるために必要がある。もっとうまくなるために。もっともっと強くなって、女川の力になるために、一度埼玉に戻る。それが、滝沢の出した答えだった。あの日、公園にやってきた子どもたちの笑顔を見て、滝沢は改めてスポーツの力を知った。サッカーがもっているその魅力の大きさを感じていた。サッカーで、子どもたちは元気になれるんだ。笑顔になれるんだ。そう思ったとき、心は決まっていた。

旅立ちの日。滝沢は、隣町で子どもたちのサッカー教室の手伝いをしていて、檜垣の元を訪れた。「ちょっと行ってきます」

こみ上げる感情を抑えながらあいさつをして、車に乗り込む。ハンドルを握り、アクセルを踏み込んだ。瓦礫の町が涙でにじんだ。「必ず戻る。必ず帰ってくるからな……」

心の中で何度も叫びながら、滝沢は、女川の町を去っていった。滝沢と同じように、女川を離れる選手はみな、女川でサッカーを再開する準備のために、それぞれの戦いの場に散っていったのだった。そして檜垣がここに残ったもう一つの理由は、このためでもあった。チームを離れた選手が戻ってくるための幹事として、準備を整える役割を誰かがしなくてはならない。それは、自分の役目だと思った。選手たちにはそれぞれの道があるが、その道は先のほうで必ず合流する。そのときに、自分がチームにいる必要がある。子どもたちと、チームのために、檜垣は残り、滝沢は旅立っていった。

合流…再び女川へ

その年の10月。滝沢が期限付き移籍をした埼玉県のチームは、県大会、関東大会を勝ち進み、社会人の全国大会へとコマを進めた。そしてその大会を最後に、滝沢は女川に戻ることを決めていた。女川では、残った選手たちが少しずつ練習を始めている。東北リーグが始まるのは来年の3月からだ。その準備をするために、早く合流したい。

友人たちの中には、それに反対する者も多かった。わざわざ被災地に戻る必要がどこにある。中にははっきりと、バカ呼ばわりする者もいた。引き留めてくれる気持ちはいれなかったが、しかし、あの震災を経験して給水には、女川を捨てることはできなかった。1軒1軒、老人の家を回って給水をしていく運転手のような、温かい人間性にひかれていた。女川は海も山も食べ物も大好きだ。それだけではない。自分が、女川の子どもたちにサッカーの楽しさを伝えていきたい。

滝沢と同じように、一時的に移籍をした人の中には、コバルトレ女川よりも上位のリーグであるJFLのチームに移った中島利司という選手もいる。しかもそのチームは、来年度のJ2への昇格を充分に狙えるだけの順位にいる。そのままチームに残ればJリーグ入りを果たせるにも関わらず、中島は来年、再び社会人リーグのコバルトレ女川に戻ってくるという。

コバルトレ女川の選手たちは今、避難所を離れ、プレハブで作られた仮設住宅に住んでいる。女川に戻れば、滝沢もまたそこに住みながら、仕事と練習と試合をすることになるだろう。不便なことも多いに違いない。それでも、戻らねばならない。その資金を貯めるため、滝沢は深夜、肉体労働のアルバイトを始めた。全国大会を終えたら、女川に帰ろうと。

遠く離れた者、女川に残った者。彼らの心はひとつだった。

復興のシンボルとして、郷土の誇りとなるべく、コバルトレ女川は今、再び立ち上がろうとしていた。